



変革期の校長に大切にしていいただきたいこと①

## 先進事例の「背景」を見抜く

これまでの学習指導要領が10年ごとに改訂されてきたことを鑑みると、次期改訂については、今年度あたりから本格的に議論が始まり、2年ほどかけて論点整理や審議のまとめが示され、徐々に全体像が明らかになっていくと想定されます。

これを受けて、今後、様々な取組が展開されますが、「新たなこと」や「大きな変化を伴うこと」に取り組む場合、多くの学校では、事前に先進校を視察したり、実践発表会に参加したりして、先進事例の情報を収集しながらより質の高い実践を目指します。しかし、こうした事例を自校に取り入れてもうまくいかないことがよくあります。長続きせず、定着もしないと悩む学校も出てくるでしょう。それはなぜか。「自校の実態に合わない」「子供が違うから」といったことをよく耳にしますが、原因はそれだけでしょうか。私は、おそらく、先進校の目に見える「現象面」だけを真似て、その背景にある取組を見逃していることに真因があるのではないかと考えています。

例えば、ICT活用の先進校を視察すると、授業開始と同時に、子供たちが自主的に端末を活用して学び始める場面を目にすることがあります。まさに自立した学習者です。この状況を視察して刺激を受けた教職員は、直ちにその姿を自校の子供たちに求めますが、思いどおりになりません。こうした事例の原因として、先進校が全校体制で積み上げてきた、「学び方を習得する」「良好な人間関係をつくる」「基礎学力を確実に身に付ける」「キーボード操作を練習する」など、取組の背景にある「子どもたちの自主的な学びを支える地道な取組」を十分行っていないことが多いのです。

校長は、教職員より高い位置から物事を眺めることができる、また、物事を深く洞察することが求められる職位です。先進事例を導入する際には、確実に成果に繋がるよう、その事例の背景まで見抜き、土台となる取組も含め、総合的に教育活動を展開することを大切にしてください。